

邊には牧場に多くの牛が遊んでゐる。マコン (Macon) の驛は可なり大きく立派である。窓外の景は平凡ではあるが非常に美しい。作物としては蔬菜、葡萄、小麦が認められ牧場が開け、果樹としては櫻んぼが多い。

ヴィルヌーブ (Villeneuve-sur-Yonne) の邊は土地は非常に平坦であるが景色は矢張り美しい。谷は廣くそこを又運河が走つてゐる。地質は一帯に石灰岩で何處も牧場が多い。そして人

家が非常に多くなる。もう巴里にも近いのである。

七時十分汽車は巴里リヨン驛に着く。暫らくの旅ではあつたが此の頃第二の郷里とも考へてゐる心安さの此の都に歸つては流石になつかしさの情を禁じ得ない。タクシーを傭つて急ぎ下宿に歸り八時久し振りの支那料理に舌鼓みを打つ。(昭和七年三月二十二日)

伊 太 利 と こ ろ

(三〇)

瀧 川 規 一

「フロレンスとラファエル」 牛津大學の陳列館にラファエルが十五六歳頃であると思へる畫像がある。筆者はチモテオ・ヴィチ (Timoteo Viti) である。少年ラファエルは鬚の毛を長くのばし帽子を冠り溫和にして惻愾な容貌をして

ゐる。父はウルビノ (Urbino) 市の貴族に仕へてゐた畫家兼詩人であつた。ラファエルは八歳の時母を失ひ十一歳の時父を失つて伯父の家にひきとられて當時ウルビノで有名であつた青年畫伯ヴィチの許に弟子入りをなした。ラファエ

ル時に十二歳、師匠の畫伯は二十六歳。師弟共に音樂好きで意氣投合したらしい。グイチ畫伯はボロニア市でフランチャ及びコスタ兩畫伯の許に學び其流風を傳へた人である。

十六七歳頃までにラファエルが描いた作品には自らグイチ畫伯の影響が現はれてゐる。倫敦の國立美術館にある「一騎士の幻想」、巴里ルーヴルにある「聖マイケル」(St. Michael)、佛國シヤンチリ(Chantilly)にある「三女神」(Three Graces)等はこの期に屬するものと云はれてゐる。

十七歳の時にはラファエルは故郷のウルビノを去つてペルヂア(Perugia)市に往つた。フロレンスで畫名を馳せた後歸郷してゐたペルヂノ(Perugino)畫伯に師事した。斯くてラファエルは少年時代にグイチ畫伯の忠實性と優美性とを表はした畫風を感得したが、今や全くペルヂノの畫魅を繼承するやうになつた。背景に描かれたウンブリアの晴れた空と風景、廣潤なる地平

線、緩かな傾斜、蜿蜒たる細流、をはじめ人物の表情姿勢は益自然を表はし純真なる悲愛の表現をあらはすに至つたのは全くペルヂノの畫風を繼いだものであるとされてゐる。若し Raphael Urbinas と云ふ彼の署名がなければ師弟何れの筆になつたのか判明し難さものとさへあると云はれてゐる。

ペルヂア滞在中には師のペルヂノ以外にラファエルの畫風に影響を與へた人がある。その人は羅馬にあつて宮殿伽藍の裝飾に従事して後ペルヂアに來たピンツリッキョ(Pinturicchio)である。この畫伯はラファエルに動的な構圖を教へたのである。

ペルヂア時代の製作は實にラファエルの受感性の豊富なることを示してゐる。隨處に師匠の異なる影響を自己藥籠中のものとなして完璧となし得る可能性を多分に示してゐる。評家はボチチェリ(Botticelli)とラファエルとを比較し前者には畫家の個性と力とを看取し得るも後者には

個性の發揮するなく只その完成品に於て圓滿無碍を見るのみであると云ふ。近代人にとつては前者により多くの牽引力を見出すのである。然しその議論は詮じつめた處評家の好き嫌ひに歸するのではあるまいか。技藝の優秀卓越は或る程度まで明に看取し得るが、それ以上は看る人の好き嫌ひが多分に影響するのではあるまいか。ラファエルの繪に圓滿溫健の性質を見出してこれを好む人は自ら素人筋である。百人好きの繪である。従つて専門評家は稍もするとラファエルを度外視してボチチエリ熱にうかされる。この時期に屬する製作品は可成澤山ある。ウ・アチカン宮にある「戴冠式」の繪、ストックホルム(Stockholm)博物館にある基督禮讃の繪及びこの時期から畫き始めたマドンナの多くの繪がある。マドンナの繪は歐洲各地に散在してゐるが爲に豫め年代を追ふた表を作つて一々點檢するに非ざれば旅行者には千歳の好機を逸することがある。

ラファエルが故郷にある日から今日まで或は直接師事し或は畫風を傳へ聞いた巨匠は多くフロレンスで仕事をした人である。そのフロレンスの市に一日も早く出たいと心に願つた。父が仕へてゐた貴族の王姫がラファエルの入市訪問の希望を協へてやる爲めに入市の知事に宛てて懇切な紹介狀を書いて與へた。この有名な紹介狀を携へて入市に姿を現はしたのは二十一歳の時であつた。ボチチエリ・ペルヂノ・レオナルド(Leonardo da Vinci)・マイケルエンゼロ(Michaelangelo)・フィリッピン(Filippino)・ギランダシモ(Ghirlandajo)・アンドレア・デル・ヴェロッキオ(Andrea del Verrocchio)・ポライウオロ(Pollaiuolo)兄弟、マサッチオ(Masaccio)等の巨匠が入市に遺した幾多の傑作を目前に見た時ラファエルは只驚嘆するばかりであつた。

ベルデア時代にラファエルが描いた聖セバスチアンの像は美しき伊太利青年の服裝姿であるが、それには兩眼球に瞳孔と虹彩の區別が描か

れてゐない。この事實はベルチア時代の繪の鑑定の一資料であると評家は云つてゐるが、今やラファエルは瞳孔と虹彩との區別を知る時が来た。

故郷のウルビーノの町は山間の小都會である。

自然美を感得するには充分な風景を持つてゐる。山間の都會村落に於て常に經驗する入日朝日の美しき變化、空の麗はしさを眺めて畫心を小供ながらに養ひ得た。ベルチアに移つては人間の美しき形に加ふるに靈的魅力を表はすことを悟つた。人物の容貌に神秘的な神々しさと平靜な氣分とを描くことを知つた。然しこれらの經驗は靜的な表現法を覺えたばかりであつた。然るにフ市に來て先輩巨匠の作品を見ると、動的な作品が多い。そこで動的な人體の研究が必要なりと感じた。殊に人體の動きを會得しなければならぬと思つた。研究心に燃えた彼はフ市に入つて初めて裸體研究を始めた。四肢の動き方とこれを遠見に描く方法とを研究した。その模範

として學んだものはドナテロ (Donatello) 及びボライウオロの彫刻であつた。ウフィッチ美術館にあるラファエルの「四人の騎士と一人の徒步の侍」の繪をアヌンチアタ寺にあるボライウオロの作つた聖セバスチアンの祭壇後の背景をなす小群像とを比較する時ラファエルの研究が何れの方向に向ひ始めたかを知ることが出来る。と評家は教へて呉れる。またウフィッチにあるラ畫伯の「ハーキュールス及びセンチートルス」(Hercules and the Centaurs) と題するものとアントニオ (Antonio) の描いたハーキュールスの小形の繪とを比較してもそれが判ると云ふ。申すまでもなくラファエルはマイケルエンゼロのダビデ (David) の像を寫した。荒削りの聖マタイの頭をも寫した。神の一家 (Holy Family) の畫、「聖母と小供」の彫刻からも多分の感銘を得た。それが後にラファエルの描く多くのマドンナ像に現はれて居る。更に深く感銘を得たのはレオナルドが佛國王に仕へる爲めミランに向つ

てフ市を去る前にのこした未完成の「東方學者の禮讃」と「聖母と聖アン」と題する繪であつた。未完成のレオナルドの「軍旗の戦」を寫したことはルーヴルにあるモンナ・リサ(Mona Lisa)と牛津及びヴェニスにある「戦鬪の騎士」とによつて知られる。二十歳までに既に若輩ながら一家をなす畫伯として世に認められたラファエルも先輩巨頭の群るフロレンス市に來ては一介の畫の書生に逆轉しなければならなくなつた。彼は再び孜孜として研鑽に日を送るべく餘儀なくされた。自己の藝術の短を眞に感知し得た。それが後日彼の大をなさしめた所以である。

ラファエルはフ市に來た最初の一ケ年は餘り揮毫の依頼がなかつた。先輩の巨頭等と同様に註文を受けることを期待し得なかつた。ラファエルの年輩から當時フ市の藝術界を推量する時揮毫を囑する人のなかつた、換言すれば彼の藝術を認めて呉れる人が容易に出來なかつたことは察するに餘りあるのである。

斯んな時に最初の依頼をなした人は畫家が後日偉大なる畫家となる丈けそれ丈け依頼者として後世まで畫と共によかれあしかれの逸話を傳へることがあるものである。それにその依頼者が潤筆料を値切るやうなことがあつたならば種々の印象を後世人にのこす。今こゝにその一例がある。

フ市にアンデオロ・ドニ(Angiolo Doni)と云ふ金持ちの商人があつた。マイケルエンゼロが「神の一家を」畫く時に潤筆料を値切つた。それでこの商人はよい作品を安價で手に入れたといふ心掛けてゐた。そこで若いラファエルに自分夫婦の繪を依頼した。噓かしラファエルは値切られたことであらうと思へる。その繪はドニとその妻マデレナ・ストロッチ(Maddalena Strozzi)と題され、ピチ美術館に保存されて有名である。巴里ルーヴルにはその習作がある。夫君の商人は赤袖の黒服をつけ心配氣な顔に鋭い目をじてゐる處如何にも一代で金をつくつた商人らしい。

之れに反し妻君は平靜な落ち着きはあるがどこやらにおつとりとした顔をしてゐる。恐らく彼女は平和な家庭の建設者であらう。ピチの繪はギランダジョの肖像畫に似通つた點を多分にもつてゐる。然るにルーヴルにある習作に至つてはレオナルドのモナ・リサの繪に酷似してゐる。これ又先輩の影響を多分にうけた證據である。

ラファエルは註文の仕事がないまゝに幾つも小さいパネルに畫を描いてゐた。このうちには實によい出来榮えのものがある。マドンナ・デル・グラン・デュカ(Madonna del Gran Duca)と題する聖母の像がそのうちの一つである。この繪は大公フェルディナンド(Ferdinand)三世が一七九九年にタスカニの貧乏な寡婦の家にあつたのを發見して之を購求したものであつてこれを好むの餘り自分が行くどこへでも持參して常に自から離さなかつたと云はるゝ曰くつきの繪である。今はピチ美術館に納つてゐる。聖母の顔には清淨な感じがあり小供は満足げな丈夫な

顔をしてゐる。整つた構圖とデッサンの單純とはラ畫伯の特徴である。

その他十八世紀の末にカウバ卿(Lord Cowper)が發見したと云はるゝマドンナの像のスケッチがウフィッチ美術館にある。或る評家はこのスケッチを見てラファエルの描いたマドンナのうちに最も愛らしき顔と云つてゐる。

次に佛國シャンチリにあるマドンナは優しい理想美と人間の情味をマドンナが表はし丈夫な肥立のよい小供を描いた小作品の尤物としてこの一群に屬するのである。

ラファエルはフ市に於てその價值を容易に認められなかつたが、ペルヂアでは當時第一派の畫伯として名聲噴々たるものがあつた。従つてペルヂア方面から依頼されるやうになつた。マイケルエンゼロは潤筆料を値切りラファエルにはフ市に於ける最初の依頼者として後世まで名を傳へた人があつたことは既に述べた。然るに今はラファエルに潤筆料を渡して遂に描いて貰

へなかつた人が出来た。クレア派に属する修道院モンテ・ルーチョ(Monte Luce)の尼僧達が祭壇の爲めに昇天の繪を描いて貰ひたいと思つて知事に相談をした。知事の推薦によつて一五〇五年の十二月にラファエルと契約した。畫伯は契約書に署名までして居り、潤筆料を前金として受取つてゐるが一向に書かなかつた。スケッチは試みたがそれ以上は筆をとらなかつた。尼僧達は氣がながく十二年間待ち呆けを喰つたが、遂にしびれを切らしラファエルの弟子二人に頼んで漸く仕上げて貰つた。ラファエルも亦世間に有勝ちなことをやつたのだと云はれても仕方があるまい。

然しバツア(Padua)市の聖アントニ院の尼僧達はまだしも幸福であつた。今日倫敦でアンシデイ・マドンナ(Ansdei Madonna)として知らるラファエルの名畫と相並んで展開されてゐるマドンナ・ヂ・サン・タトニオ(Madonna di sant' Antonio)は共に依頼者たる修道院を満足

せしめた。

太公夫人デオヴァンナ(Giovanna)の言によるとフロレンス市時代のラファエルは常に遠慮深くあつて而かも接するに人を魅了した。同輩の何人に對しても嫉妬心を抱かず親切であつた。他の畫生が援助を求むれば何時でも仕事を止めて手傳つてやる。繪の草稿を見せて呉れと頼む人あらば何時でも惜まず見せてやる。後輩に對しては常に讃辭を以て獎勵する。故郷のウルビーノにあつては廷臣の男女に好かれ、フロレンス市のバッキョ・メ・ニオロ(Baccio d'Agnolo)の家に當時集つた畫家の群にとつても同様に好かれたと云ふ。ラファエルの描いた繪は素人好きのする繪である。萬人が悪感を抱かぬ繪である。然かも人間としてのラファエルはまた斯くの如く人に嫌はれない。この青年畫伯は二十三四歳の頃どんな風豊であつたであらうか。

斯んな想像を浮べながらフロレンスの兩美術館を搜し歩く。ウフィッチ美術館にあるものが

それである。肌觸りのよささうな、内氣な性質の聰明さを顔に示してゐるが、餘り丈夫な體格ではない。邦人の標準から判斷すると面長な婦人ではあるまいかとさへ思はれる。

ラファエルのフロレンス滯留期間を一五〇四年の十月例の紹介狀をもつて來た時から一五〇八年の夏羅馬に向つて去つた時までの四年足らずの間とする。その間にはフロレンス市の藝術界に於て種々の變化が起つた。マイケルエンゼロは法王ジュリアス二世(Julius)の爲めに召されて羅馬に去つた。レオナルドはフ市の宮殿の廣間の壁に一群の色彩の圖案を試みたが厭氣を起しミラン市に居るフランク王に仕へる爲めに去つた。居残つたフラ・バルトロムメオ(Fra Bartolommeo)と云ふ畫僧のみがラファエルの指導者となり友達となつた。自然この畫僧の影響をうけることになつた。

新著紹介

○A Miocene Flora From Grand Coulee, Washington. By E. W. Berry.

U. S. Geol. Survey, Professional Paper,

170-C, Pp. 31-42, 1931, Price 10 cents.

北米ウオシントン州コロムビア川流域グラントクーリーの北端附近で一九二七年以來、Bonser, Robert 以下二名の探集に係る二五科三四屬五個の植物化石の研究報文で圖版三頁を附す。僅に五屬は裸子植物で他の全部は被子植物である大部分は第三紀中新世以後の北米の地層からは發見されざるものゝ *Glyptostrobus*, *Palurus* の如く舊大陸のみに現存するものもある。以上の化石を産する地層は中新世多分上部中新世に屬するものである。(上治)

○Glaciation in Alaska. By Capps, S. R.,

U. S. Geol. Survey, Professional Paper, 170-A,

Pp. 1-8, 1931, Price 15 cent.

アラスカに於ける洪積氷河の分布を研究した論文である。該地では現今の氷河は南方の海岸地域の高地で、而も降水量多き地方に限つて存在し、全アラスカの三%の面積を占めて居る。地質時代に於ては古生代の中期以後屢々氷期の存したことを見るがフライストシン氷河、殊にワイズコンシン期の氷河がアラスカに於ては南方海岸地域と北部アラスカの高地帯の二地域に氷田を作り、中部のニューコン川低地及北極海斜